

聖書:ルカの福音書3章15~38節

説教:聖霊と火によって

はじめに

いま、コロナが一刻も早く終息することを願ひ、その切り札としてワクチンの接種に多くの人たちが期待を寄せています。いつの時代も、本当に困ったことが起こると、人々は自分たちを助けてくれる何かに期待を寄せてきました。

二千年前、イスラエルの人々はキリストを待ち望んでいたと15節にあります。洗礼者ヨハネを見て彼がもしかしてキリストなのだろうかと思っていたというのですから、待ち望む熱心さは並大抵ではありません。なぜ、人々はキリスト、すなわち救い主を待ち望んでいたのでしょうか。もちろん旧約聖書の中で、やがて救い主がイスラエルに遣わされるということが語られてはいました。でもだからと言って、すぐに心の底から待ち望む気持ちになるわけではありません。熱心に待つには何か訳があります。その訳とは何か。今日はそのことをまず確認してから、ではキリストであるイエスはどのようにして人々の期待に応えられたのかを考えてまいります。

## 1 領主ヘロデ

### 1) ローマに取り入る

人々が熱心にキリストを待ち望んでいたことについては領主ヘロデが深く関わっていますので、まず18、19節から見ていきます。「しかし領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロディアのことと、自分が行った悪事のすべてをヨハネに非難されたので、すべての悪事にもう一つ悪事を加え、ヨハネを牢に閉じ込めた。」

聖書にはヘロデという同じ名の人何人かいて混乱してしまいます。イエスがベツレヘムでお生まれになったとき、ベツレヘム周辺の二歳以下の男の子を殺させたのがヘロデ大王と呼ばれる人でした。彼はイスラエル国内での後継者争いが起きたとき、ローマ帝国に取りいってローマの元老院から「ユダヤの王」という称号をもらい、権力を手にしました。その父親が亡くなって跡を継いだのが18節に出てくる息子の領主ヘロデ（ヘロデ・アンティパス）です。

このヘロデは民衆の目にはどう映るでしょう。イスラエルは、アブラハムのときから神の約束の地として定められ、モーセによって導かれ移り住んだ地です。それがいまヘロデがこの国の王であると

名乗りながら、いっぼうではローマ帝国の機嫌をうかがって言いなりになっています。そればかりではありません。

### 2) 兄の妻ヘロディアと結婚する

彼は、ヘロデの母親が異なる兄ピリポの妻ヘロディアと結婚します。レビ記18章に「自分の同胞の妻と寝て交わってはならない」とあって、明らかに律法に違反したことをどうどうとおこなっていた。しかし、誰もそのことを口に出さない。みな見てみふりをして黙っています。なぜか。日本では、建前では表現の自由は認められていますが、天皇に対して批判的なことを言うてはならないという暗黙の了解があります。もしそれをやったら場合によってはいのちの危険が伴います。それとよく似ています。

こんなことが続くと、心ある人は誰でも思います。失われてしまった神の国を取り戻したい。真実なイスラエルの王が現れないだろうか。人々のキリスト、救い主を待ち望む思いが強くなっていったとき、ちょうどそこへ現れたのが洗礼者ヨハネ。人々は「もしかするとこの方がキリストではないか」と思ったのも当然でした。

## 2 ヨハネが語ったこと

### 1) 聖霊と火でバプテスマを授ける

しかしヨハネはこれをきっぱりと否定してこのように証言します。16節。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。」

ヨハネは罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝え、罪を悔いる人々にはヨルダン川の水でバプテスマを授けていました。しかし、ヨハネの後に来られるイエス・キリストは、聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けるのだと言います。さてここで問題です。聖霊と火とはなにか。今日のポイントです。私たちはクリスチャンになるときに水でバプテスマを受けましたが、聖霊と火によってバプテスマを受けた記憶はあるか。おそらく、「ない」と言うでしょう。ではヨハネは何を語ったのか。

### 2) 掃ききよめる、火で焼き尽くす

それで17節を見ます。「また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、穀を消えない火で焼き尽くされます。」

箕がどんな道具かすぐにわかる人は少ないし、使ったことのある方はもっと少ないでしょう。週報に絵を載せておきました。脱穀した麦を箕に載せ、風が吹く場所で跳ねると、麦の実重いのでそのまま残り、軽いもみ殻は風に飛ばされて外に落ちる。そうやって麦の実と殻を選別する道具です。イエスは、箕という道具を使って麦と殻を選り分け、麦は倉に納めて、殻は火で焼く。実際の農作業は本当にこの通りです。

お気づきかもしれませんが、ヨハネはこれとおなじことを9節でも語っていました。「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

倉に納められるのは良い実である麦。良い実を結ばない木は切り倒されるように、良い実が残っていないもみ殻は燃やされる。だから悔い改めにふさわしい実を結びなさい。倉に納められるのと、火で燃やされてしまうのとでは大変な違いです。「私たちはどうすればよいのでしょうか」とヨハネに尋ねたのは当然でした。

「悪いことをして地獄に落ちないように、あなたがたは生きている間に善行を積み重ねなければならない。」そのようなことを言っているのではありません。そもそも、私たちは自分の力で良い実を結び、自分で自分を救うことができません。それはヨハネもできない。だから自分は価値のない者だという。ヨハネの後に来られる力ある方が私たちを助けてくださいます。ではどのようにして助けてくださるのでしょうか。そのことが次の場面にあります。

### 3 イエス

#### 1) 天が開け聖霊が降る

21, 22節。「さて、民がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマを受けられた。そして祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。『あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。』」

イエスが十字架に向かうスタートを切るにあたり、ご自身もヨハネからバプテスマをお受けになります。そのときなにが起きたか、ふたつありま

す。一つは、天が開けてイエスの上に聖霊が降ったこと。

#### 2) 天から声がした

二つ目は、天から父なる神の声が聞こえてきたこと。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

相撲で「三役そろい踏み」というのがあり、千秋楽で、最後の三番を取る前に、大関、関脇、小結が土俵に立って四股を踏むことをいうのだそうです。ここもそれと似ていて、父なる神、子なるキリスト、聖霊の三つの姿をとられる神が勢揃いして、四股は踏みませんが、それぞれに役割を果たしています。三役がそろうのは聖書の中でも非常に珍しい。どうして三役がそろうのでしょうか。

#### 3) なぜ励ますのか

例えば学校の入学式とか、就職すれば入社式とか、人が何か新しいことをはじめるときには、皆が集まってお祝いをします。イエスの場合はどうでしょう。神が人を罪から救うという大事業のスタートラインに立っています。この大事業を成功させるために、みなにご登場願ってお祝いしてもらった、ということでしょうか。確かに十字架は成功させなければなりません。そのためにこそイエスは人となって来られました。しかし、それは希望に満ちた明るい未来とはまったく反対です。ご自分のいのちをお捨てになり、十字架でのろわれた者となり、罪を背負ってさばかれる。どう考えてもこれ以上のない苦しみがあります。そんな旅にいま出ようとしています。

このときのイエスのお気持ちを想像してみてください。この方は神の子だから、たとえ十字架がこの先に待っていても平気だった、ということでしょうか。そんなことはありません。ゲッセマネの祈りでも分かるように、平気で十字架に向かうことはとてもできません。でも出発しなければならない。父なる神はその苦しみをご存じです。だからこう言って励まします。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」それだけではなく、父なる神は聖霊も降して下さって、イエスを励ますのです。

#### 4) 聖霊と火によって

ヨハネが、「この方は聖霊と火によってあなたがたにバプテスマを授けます」と語った意味がここにあります。神が人に聖霊を与えて救い、そうでない者は火で焼き尽くす。そのように取ることもあ

きますが、これはイエスについても言うことができます。

私たちはイエスの十字架を通して救われました。この救いの道はどのようにして用意されたのでしょうか。今日の箇所にあります。まずこの方に聖霊が降らなければならなかった。聖霊の励ましがなければ達成できないほどの苦しみに向かわれました。その先には十字架が待っています。この方が、罪を背負われさばかれます。ヨハネのことばで言えば、殻を消えない火で焼き尽くす、あるいは、良い実を結ばない木はすべて切り倒される。十字架とは良い実を結ばない木の象徴です。だから火で焼かれていった。

私たちが今この時代にこのように生かされていることの意味は、すぐにわからないでしょう。自分で振り返れば、思い通りにいったことは少なく、むしろ失敗したり回り道ばかり、あるいは突然目の前で道が閉ざされるようなこともあった。よい人生だったとはとても思えない。しかし、神の目からご覧になるならまったく違う。

23節以降にはイエスの系図が記されています。系図をたどっていくと、罪を犯してのろわれたアダムにつながっていて、イエスはアダムの子孫としてお生まれになったことが書かれています。これはなんでしょう。アダムの人生は失敗したように見えた。彼らの息子であるカインは弟を殺してしまう。どう見ても悲惨な家庭です。

しかし、この系図は教えてくれる。それで終わりではない。その先にイエスがお生まれになった。ということは私たちの人生も同じ。自分は誰からも愛されていない、親や家庭が悪い、世の中のせいで、人にだまされて人生がめちゃくちゃにされた。そうやって絶望したくなるときがある。しかし、イエスは絶望するような家系のもとに生まれてくださった。そのイエスに父なる神は語りかけた。「あなたはわたしの愛する子である。あなたを喜ぶ。」どんなことがあろうとも絶望しなくてよい。そういうメッセージです。十字架という苦しみの向こうに必ず神の恵みが用意されている。イエスがその道を最初に歩まれました。私たちはこの方の足跡を踏みながら歩んでまいります。